日本医史学雑誌第四十四巻第一号　平成九年一月三十一日受付
平成十年三月二十日発行　平成九年十一月二十八日受理

モーゼス・マイモニデスの生涯（上）

泉　彪之助

著者は、中世のユダヤ人哲学者・医学者モーゼス・マイモニデスの経歴を調べたところ、スペインのコルドバで生まれたがエジプトのカイロで活躍し、医学上の著作がすべてアラビア語で書かれているなど、今まで理解していたのと異なることに気付いた。

ここでは、マイモニデスの生涯を概観し、その背景と意義を考えたい。

医学上の業績は、機会を改めて報告する。

一・研究方法

マイモニデスについての史料は、次のものがある。

（一）医学上の著作。後述のように十編の著作が知られている。

（二）宗教、哲学、その他の著作。『ミシュナ注解』、『ミシュネ・トーラー』、『迷える人々への導き』の三主著と種々の小論、論理学、暦法に関する著作などがある。

（三）書簡。個人的書簡と、各地のユダヤ人コンミュニティーからの宗教上の質問に答えた交換書簡（レスポンサ）がある。

宗教問題を主題とした信者への書簡は、「背教についての手紙」[1]、「イエメンのユダヤ人への手紙」[1][2]、「マルセイユの賢者たちへの手紙」[2][3]などが知られているが、これらはレスポンサとは別のようである。

第九番目の医学的業績は、英訳別名が Medical Answers (Responsa) となっているが、これはスルタンの質問に答えた形のもので、宗教上のレスポンサとは区別すべきであろう。

（四）カイロ・ゲニーザ中の文書。ゲニーザというヘブライ語は、神聖な文書を最終的には土に埋めるつもりで保存する慣習をいう。一八九〇年代にカイロのベン・エズラ・シナゴーグの貯蔵室から発見された文書、いわゆるカイロ・ゲニーザの中に、マイモニデス自筆の文書が発見された。[4] アイザックスが報告している文書は、ただゲニーザとあるが、内容から見てカイロ・ゲニーザの一片であろう。[5]

（五）他の人の著書に引用されたマイモニデス自身の手記や、マイモニデス周囲の人々による記録がある。

（六）すでに十三世紀に、マイモニデスの伝記が書かれた。[6][7]

マイモニデス研究は長い歴史を持つが、医史学的観点からは十九世紀に始まるといえよう。

（一）十九世紀に、ヨーロッパの学界を中心として原典研究など優れた業績が生まれた。その後も欧米とイスラエルで、マイモニデスに関する研究書や論文が多く出されている。著者の知るかぎり、日本ではまだマイモニデスについて独立した研究書はない。

（二）ユダヤ医学史、アラブ医学史の文献に、マイモニデスのことが記載されている。

これらの内、著者が入手したのは、著書『モーゼス・マイモニデスの医学箴言集』[8]、『喘息について』[9]、『毒物と解毒剤』[10]、『痔疾について・医学についてのレスポンサ』[11]、『迷える人々への導き』[12]の英訳、科学史上のマイモニデス研究書[13]、ユダヤ医学史[14]〜[16]、アラブ医学史の文献[17][18]などで、広範なマイモニデス文献のごく一部に過ぎない。

著者は、福井県立病院図書室の好意でマイモニデスをキーワードとして Medline で検索し、引用文献をたどって、同

院図書室と金沢大学医学部図書館から約四十編の欧文論文を入手した。今回は、そのうち約二十編を引用した。

マイモニデス自身の著書を別として、著者が入手した文献で重要なのは、ユダヤ医学史の権威ハリー・フリーデンウオード（Harry Friedenwald）（一八六四―一九五〇）[19][20]の、論文「医師マイモニデス」[21]を始めとする業績である。フリーデンウオードは、メアリランド大学の眼科の教授であったが、父親の影響を受けてユダヤ医学史に関心をもち、多くの史料・文献を収集すると共に多数の論文を書いた。W・オスラーが医史学に関心が深く、マイモニデスを"Prince of Physicians"と呼んだことは有名だが、フリーデンウオードは医史学についてオスラーと交流があった人で、「オスラーの講義で医史学への目が開かれた」とのべている。[22]

このフリーデンウオードの業績、マイモニデス著書の解説[2][23]〜[25]、研究書、ユダヤ医学史・アラブ医学史の記載、マイモニデス研究者の論文[1][3][6][7][26]〜[37]、一般史の文献などを参考にし、マイモニデスの生涯を概観する。

欧米の研究者がのべているように、一次史料を用いてもマイモニデスが受けた医学教育など不明のままであり、定説となっている年度にも異論がある。史実の記載も、研究者によって差がある。これらの限界を知りながら考えて行きたい。

記載に際して、七世紀以降のイスラム教徒支配下の領域を、政治史的にはイスラム世界、文化史的にはイスラム社会と総称する。イスラム世界が東西の両中心に分かれた後は、必要な場合東方、西方を付記した。

従来アラビア医学、アラビア文化と表現されたものは、最近の学界の趨勢に従い、アラビア半島とその住民、アラビア語に関することを除き、アラブ医学、アラブ文化と表現した。

アラビア語のローマ字表記は文献によって異なることが多いが、そのまま記載した。文字につけられた発音符号は、記載の有無が統一されていないので省略した。アラビア語の発音はしばしばローマ字表記と一致しないので、マイモニデスと関係の深い人名は片仮名とローマ字で表記したが、その他はローマ字または片仮名表記のみとした。

二・スペインのマイモニデス

モーゼス・マイモニデスが、ヘブライ名をモシェ・ベン・マイモン、略称ランバムということは前稿で報告した。[38] Rabbenu Moshe ben Maimon Hasefardi という言い方もある。[6] Rabbenu は「われらの師」で、Rabbi（ユダヤ教教師・律法学士の意味で使われるが、本来の語義は「わが師」）よりも尊敬の念を深めた表現、[39] Hasefardi は前稿でのべたセファルディ系（スペイン系ユダヤ人）人物の意味である。[38][40] 著書のラテン語訳では、名前を Rabbi (Raby) Moyses とも書かれる。[22][41]

前稿で日本語文献に書かれたアラブ名を記載したが、[42] 欧米文献では多様で、El-Scheich Abu Amran Musa Ben Meimun el-Cordobi od. Moses Ben Obeidallah、[17] Abou Amran Moussa ben Mimoun ben Obeid Allah (Quort hoby)、[18] Abu Imran Musa ibn Maimun ibn Abd Allah or ibn Ubayd Allah[21] などと書かれている。[33] Musa はアラビア語のモーゼ、ibn は息子で、Musa ibn Maimun はヘブライ語と同じくマイモンの息子のモーゼという意味である。Abu は父で、Abu Imran は本来は Imran の父という具体的な意味だが、同名人から区別するための抽象的な名前としても使われる。[17] Obeidallah あるいは Abd Allah は「神のしもべ」で、マイモニデスがよく自称として使った名だという。[17] el-Cordobi と Quorthoby は、コルドバ出身の意味である。Scheich はモスクの主席祭司で、ここでは Rabbi のアラビア語訳であろう。

（注1）

マイモニデスは、ユダヤ暦四八九五年ニサン月十四日（西暦一一三五年三月三十日）にスペインのコルドバで生まれた。[1][2][6][26][28][31][32]

（注2）

マイモニデスの生年には異論があり、ビュステンフェルトはイスラム暦五三四年（西暦一一三九年）、[17] ロスナーは西暦一一三八年としている。[43] 前者は、史料的根拠をあげていない。ロスナーは、マイモニデスの著書『ミシュナ注解』（一一六八年）の自筆原稿に三十才と書かれていることを理由とし、一一三五年という根拠が著者不明の原稿断片から来たもので

信頼できないという。ちなみに一九三五年、すでにナチスのユダヤ人弾圧は始まっていたが、ヨーロッパ各地でマイモニデス生誕八百年が祝われた。[26][44][45]

マイモニデスの家は、コルドバのユダヤ人の名家であり、父マイモン(Maimon ben Joseph)はダヤン(Dayan or Dayyan)であった。[2][35]このダヤンは英語ではjudgeと訳されているが、純粋な司法官でなく、ユダヤ人コンミュニティーの第二位の指導者である(後述)。　母が出産後死去したので、[28][32]マイモニデスは父に育てられ、ユダヤ社会の伝統にしたがって父から教育も受けた。[2]マイモニデスには、兄弟と妹がいたことが知られている。フィッシュバインは、マイモニデス少年時代の教師としてRabbi ibn Migasという名を挙げているが、[24]フリードレンダーは、その著書を読んだだけであるという。[2]

しかしマイモニデスの教育が、家庭内のみで行われたとは断定できない。フリーデンウオードは、コルドバに、カリフが開設したイスラム教徒もユダヤ教徒も平等に学習できる学校(academy)や、ハスダイ・イブン・シャプルート(注3)が十世紀後期に設立したユダヤ人のための高等教育機関があったとしている。[21]コルドバ、トレド、グラナダには立派な医学校があったが、スペイン最初の大学サラマンカ大学が開学したのは約百年後の十三世紀半ばであった。[21]

一一四八年、マイモニデスが十三才のとき、コルドバはアルモハド族に占領され、その支配下におかれた。[2][18][46]アルモハド族は、ユダヤ人に改宗か、追放か、死かの選択を迫った。[2][18]スペイン名アルモアデ(Almohades)、英語名アルモハド(Almohads)は、アラブ名アル・ムワッヒドゥーンからきた名前で、アラブ名は「唯一性の主張者あるいは唯一神を信ずる者」を意味する。アルモハド族は、北西アフリカに住んだベルベル人の一派で、宗教的不寛容を特徴とし、ときにイスラム過激派あるいは狂信派と表現される。[2][46]

ムワッヒド運動第二代の指導者アブドゥル・ムーミンは、ムワッヒド朝(一一三〇―一二六九)を建て、同じベルベル人の王朝ムラビト朝(一〇九一―一一四五)をほろぼし、ムラビト朝と同じくモロッコのマラケシュを都とした。ムワッヒド朝はスペイン南部のアンダルシア地方も勢力範囲とするが、本格的にスペインに進攻するのは少し後のことで、マ

イモニデスの時代にコルドバを占領したのは、ムワッヒド朝初期のアンダルシア干渉における分遣隊のような性格のものであったらしい。[47]〜[49]

その後のマイモニデス一家について、二つの説がある。

一つは、マイモニデス一家がアルモハド族の支配後直ちにコルドバをはなれ、南スペインおよび北西アフリカのマグレブ地方（現在のモロッコ・アルジェリア・チュニジア）を転々としたという説である。[1][2][21][32][35]

もう一つは、マイモニデス一家がイスラム教徒に偽りの改宗をし、隠れユダヤ教徒としてコルドバにとどまったというものである。[18][33] この説はもともと十三世紀の伝記作者たちの記載によっており、ヒッティは「この説は最近きびしい批判をうけている」としているが、批判の内容は明らかでない。[49] ビュステンフェルトは、マイモニデスたちが形の上だけイスラムの儀式を行ったという。[17] ルクレールは、マイモニデスがカイロでイスラム教徒からユダヤ教徒に再改宗したことを、スペイン時代のマイモニデスを知るものから発見され危険な状態となったが、マイモニデスの患者であったサラディンの宰相アルファーディル（後述）によって救われたという[18]（イスラム教は、他宗教の信仰には寛大であったが、一旦イスラム教徒となった他宗教の信者が元の宗教に再改宗することを死刑を以て禁じた）。マイモニデスは「背教についての書簡」に、宗教的迫害の下で偽りの改宗をしても罪ではないという説を書いている。[1][2] これらは偽りの改宗説を支持するように思われるが、直接的な証拠でないので、二説あることを指摘するにとどめたい。[2]

困難な生活の中で、マイモニデスはユダヤ教を中心とした学習を続け、進歩はめざましかった。マイモニデスが十六歳のとき論理について最初の著書を、二十三歳のとき暦法についての著書を著した。[2][6][32][33]

先にのべたようにマイモニデスが受けた医学教育については史料が乏しく、明らかでない。医学を学んだのはモロッコへ移ってからという説と、[21][29][33][35] 南スペインとマグレブを流浪中にすでに学び始めたとする説がある。[21] 一般教養の一環として医学を学んだともいう。[7][26] ビュステンフェルトは、マイモニデスがイブン・トゥファイルとアベロエスから医学を学ん

だとしているが、[17][31] アベロエスの哲学書を読んだだけという説もある。[2] ブロックシュタインは、マイモニデスが父から宗教と数学を、アラブ人教師から哲学、自然科学と医学を学んだとのべている。[1] マイモニデスには天文学についての記述もあり、「マルセイユの賢者たちへの手紙」で、人は知性によって理解できるものだけを信ずるべきであるとし、占星術を迷信としてきびしく批判した。[2][6]

マイモニデスは、『迷える人々への導き』の一節に「私は Ibn Aflah of Seville[12] (Abu Muhammad Jabir ibn Aflah[21]) の息子と知り合いで、Abu Bekr ibn Alzaig[12] (Abu Bakr Muhammad ibn Yahya ibn al-Saigh[21]) の弟子の一人は私の学友(fellow student)であった」と書いている。[12a] ibn Yahya はアラブ医学者アベンパケで、ルクレールは上の fellow student にあたる語を Maître(教師)と訳しているが、[18] その正否は著者には不明である。Ibn Aflah は天文学者であった。

アベンパケ(イブン・バージャ[49]) (Abu Bekr Muhammed Ben Jahja Ibn Badsch-dscheh el-Todschibi el-Saracosti, Aben Pace, Aven Pas, Ebn Badja ou Abou Bekr Mohammed ben Iahya, Avenpace[18]) (十一世紀末―一一三八) は、サラゴサに生まれ、医師、詩人、哲学者として知られる。セビリア、グラナダに住み、後にフェズで宮廷の侍医となり、同地で死去。

マイモニデスが、イブン・ズフルから影響を受けたことは確実と思われる。[32] イブン・ズフル(アベンゾアル) (Abu Merwan Ibn Zuhr, Abu Merwan Abd el-Malik Ben Abul-Ala Zohr Ben Abd el-Malik―Ibn Zohr,[17] Abou Merouan Abd el Malek ben Abil, Ola ben Zohr, Avenzoar[18]) (一〇九一―一一六二) は内科に堪能であったアラブ医学者で、セビリアで生まれ、コルドバの医学校で学び、ムワッヒド朝に仕え、セビリアで死去した。著書『治療と食事療法要覧』(el-Teisir filmodawat wel-tedbir,[17] 一般に Theisir, le Teissir,[41][18] Al Taisir[50]『要覧、詳解』[49]) などと略される。Practical Manual of Treatments and Diet[51]) が有名である。

イブン・ズフルの家は代々医師の家系だったが、イブン・ズフルの息子アブ・バクル (Abu Bakr,[3] Abu Bekr Muhammed Ben Abd el-Malik―Ibn Zohr,[17] Abou Bekr Mohammed ben Ali Merouan ben Zohr[18]) (一一一三―一一九九) も医師でムワッヒ

ド朝に仕え、マイモニデスと知り合いであった。『喘息について』の中でマイモニデスは、アブ・バクルからある患者の治療についてアベンゾアルの意見を教えられたと書いている。[9a] アブ・バクルはセビリアに住んでいたが、カリフの侍医としてモロッコに移り、マラケシュで死去した。[17][21]

イブン・ズフルから影響を受けたもう一つの証拠は、マイモニデスの著書『モーゼス・マイモニデスの医学箴言集』に引用されたイブン・ズフルの箴言が、他のアラブ医学者に比べて特別に多いことである。他の医学者がせいぜい数句なのに、イブン・ズフルは多数引用されている。[8]

イブン・トゥファイル（Ibn Tufail, Abu Bekr Ibn el-Tofeil, Abou Bekr Mohammed ben Abd el Malek ben Thofaïl el Kissy）[42][17]（十二世紀初め―一一八五）は、アベンパケに師事、コルドバで医業に従事、後にムワッヒド朝の侍医で高官となった。新プラトン派の哲学者として知られる。著書の哲学的小説『用心深いものの子、生存者』は、『ロビンソン・クルーソー』の原典という説がある。マラケシュで死去。[49]

アベロエス（イブン・ルシュド）（Averoes, ibn Rushd, Abul-Welid Muhammed Ben Ahmed Ibn Roschd el Maliki, Aboul Oualid Mohammed ben Ahmed ben Mohammed Ebn Rochd）[42][17]（一一二六―一一九八）は、マイモニデスと同じくコルドバに生まれたが、イブン・トゥファイルの後任としてムワッヒド朝の侍医となり、モロッコのマラケシュに移った。アリストテレス哲学についてのアベロエスの著書は高く評価されたが、この業績は、侍医としてマラケシュ滞在中、ムワッヒド朝のカリフの示唆で生まれたものという。アベロエスは、その後スペインでムワッヒド朝の法官となったが、異端を疑われ投獄され、釈放後モロッコにもどり、マラケシュで余生を送った。マラケシュで死去したが、墓はコルドバにある。[17][18][33][42]

アベロエスの著書『医学概説』（al-Kulluiat fil-Tibb, el Kitab al Kulliyat al-Tibb, Liber universalis de medicina, Colliget.）[42][50]しばしば al Kulliyat《概説》と略される。ヨーロッパで用いられた略称Colligetは、[52] al Kulliyat のラテン語訳であろう）は、アラブ医学の重要文献としてその輝きをとどめている。[50][52]

具体的な名前ではないが、『喘息について』の中でマイモニデスは、「これらの処方を西の（モロッコの）大家たちから教えられた」と書いている。[9b]

三・モロッコのマイモニデス

一一六〇年ごろ[31]、すなわちマイモニデスが二十五才のとき、一家はモロッコのフェズ（フェスあるいはファース）[53][54]に居をかまえた。[18]

フェズは、モロッコに初めて王朝を建てたイドリス朝（七八八―九七四）が最初の都ムーレイ・イドリスに続いて都とし、後にマリン朝（一二六九―一四六五）も都とした町で、モロッコの文化的中心となったところである。ある文献は、フェズをアレキサンドリア凋落後の北アフリカにおける文化の中心とした。アルモハド族にコルドバを追われたマイモニデス一家が、なぜアルモハド族支配下のモロッコに住んだのか、明らかでない。[21]

マイモニデスのフェズでの生活について、細かなことは不明である。フェズには、この地方がローマ帝国の支配下にあったときからユダヤ人が住んでいた。今のフェズに、旧市街フェズ・ジャディド地区の南部に旧ユダヤ人街があるが、これは十五世紀に建設されたものである。それ以前のユダヤ人居住区は、市街の北部、旧市街フェズ・エル・バリ地区の北寄りでバブ・ギッサ門の近く、かってヤフディと呼ばれた地域にあったらしく、[53] マイモニデスが住んだのもこのあたりでなかったかと想像される。イスラエル建国後、フェズのユダヤ人は、ほとんどが弾圧を避けてイスラエルに移住した。

マイモニデス一家は五年間フェズに住んだが、ふたたびモロッコをはなれた。一説によれば、マイモニデスの恩師Judah ibn Shoshan or Sosan[21]が宗教的理由で処刑されたことが直接の動機となったという。[33]

四・パレスチナのマイモニデス

マイモニデス自身の手記によれば、ユダヤ暦四九二五年（西暦一一六五年）イヤル月四日、マイモニデス一家は乗船してパレスチナに向かった。シバン月三日、無事アッコに到着。四九二六年のマルヘシュバン月四日にアッコを離れてエルサレムに向かい、困難な旅の後エルサレムに到着した。同月九日エルサレムを出発、ヘブロンのマクペラの洞窟を訪れた。[55]（注2）

上のようにモロッコからパレスチナに向かった一家は、アッコに上陸して滞在し、その後エルサレムを訪れた。一家は祖先の地パレスチナに永住する希望を持っていたが、十字軍占領下のエルサレムを見て失望し、パレスチナをはなれたともいう。

マイモニデス一家が訪れる約七十年前の一〇九九年、第一次十字軍がエルサレムを占領し、その際「踵が血にひたるほどの残虐な殺戮が行われ、イスラム教徒だけでなくユダヤ人も犠牲となった。[56]

一家がエルサレムを訪れたとき、その中心、聖墳墓教会の南で現在ムリスタン（クルド・ペルシャ語で病院の意味）と呼ばれる地域に、聖ヨハネ騎士団が設立した完備した病院があった。[57][58]

塩野七生氏は、ロードス島に聖ヨハネ騎士団が建てた病院の医師は、ほとんどがユダヤ人であったとしているが、[59]エルサレムの病院でユダヤ人医師がどのような立場にあったのか明らかでない。エルサレムを訪れた当時、マイモニデスの医師としての生活は始まっておらず、病院に関心をもたなかったかも知れない。いずれにしても、キリスト教徒が聖地奪還の感激に燃えるエルサレムの空気は、マイモニデスにとって愉快なものでなかったろう。

一家は、ヘブロンなどユダヤの旧跡も訪れたが、結局パレスチナをはなれ、エジプトに向かった。

五・エジプトのマイモニデス[2][21]

一家は一一六六年（ほとんどの文献が一一六五年としているが、前記の手記からユダヤ暦四九二六年、西暦一一六六年以降でなければならない）にエジプトに着き、アレキサンドリアを経て、フスタート（Fostat or Fustat）に定住した。[18][21][60] フスタートは、六四〇年にアラブ人がエジプトに進攻した時に建設された軍営都市で、翌年イスラム教徒のエジプト支配が確立すると首都とされた。[49]

マイモニデス一家がエジプトに移住したとき、エジプトを支配していたのはファーティマ朝（九〇九―一一七一）であったが、ファーティマ朝は九六九年にエジプトを征服すると、フスタートの北にアル・カーヒラ（勝利者）を建設し、これを都とした。[49] カイロという都市名は、カーヒラのなまりである。佐藤次高によると、カーヒラは政治の中心として機能したが、経済的な実権はなおフスタートの商人たちにあった。またファーティマ朝は異教徒に寛大であり、ユダヤ人も政治・経済に活躍したという。[61] マイモニデス一家がエジプトをめざしフスタートに住んだのは、このような事情によるものであろう。

マイモニデスが移り住んでまもない一一六八年十一月十三日、フスタートは十字軍の進攻をくいとめるため火をかけられ、焼失した。[61] その後、一部は再建されたが、ふたたび往時の繁栄をとりもどすことはなかった。フスタートは今、カイロの南、オールド・カイロと呼ばれる地域に廃墟として残っている。

エジプトには早くからユダヤ人のコンミュニティーがあったが、とくにこのころ、カイロは重要なユダヤ人居住地となり、ユダヤ教の中心地ともなった。一一六七年にカイロを訪れた旅行家トゥデラのベンヤミン（Benjamin of Tudela）によれば、七千人のユダヤ人がいた。[21] マイモニデス一家がエジプトへ移住した理由の一つに、カイロのユダヤ人コンミュニティーが抱えるユダヤ教の教義上の問題があったとの説がある。[34]

一方、十世紀から十一世紀末にかけ、バグダッドに起こった政治的混乱から、多くの知識人がイラクからシリアのダマスクスやエジプトのカイロに移住し、イスラム文化がカイロへ移植され、カイロがイスラム文化の中心の一つとなった。[62]

マイモニデス一家は、エジプトで宝石商を営んだ。[2][21] しかしエジプトに来た翌年父が死去し、また貿易に従事し一家の経済的中心であった弟(兄?)ダビデがインド洋で海難事故にあい、命と家産を失った。[1][2][21][33] マイモニデスは、自分の研究に専念すると共に、ユダヤ人・コンミュニティで教育にあたっていたが、[1][26][27] 弟の未亡人と子供を養育する責任を負い、生計を立てるため医師を開業した。[1][2][21][27] マイモニデスは、やがてこの地方のユダヤ人コンミュニティーの指導的地位(ナギッドあるいはガオンおよび主席ラビ)に就任した。[1][7][18][26] ナギッドやガオンの意味は後述する。またフリーデンウオードは、マイモニデスは主席ラビになることを辞退したとのべている。[21]

マイモニデスの重要な著作は、このカイロの生活の中で生まれた。

クルド族出身のイスラム教徒の名将サラディン(サラーフ・アッディーン)(一一三七〜八—一一九三)は、一一六九年にエジプトの主権者となった。名目はファーティマ朝の宰相としてだが、史家はこれをアイユーブ朝(一一七一—一二五二)の創立とする。[61] マイモニデスは名医として評判が高く、アイユーブ朝の宮廷に招かれて侍医となった。ほとんどの文献が、マイモニデスがサラディンの侍医となったと書いているが、[26] 佐藤次高は「マイモニデスがサラディンの侍医であったというのは伝説であり、実際はサラディンの子の侍医であった」としている。[61] たしかにサラディンはカイロをはなれて各地に転戦することが多く、とくに一一八二年シリアに向かった後はカイロに帰らず、一一九三年に死去したのもシリアのダマスクスであった。病弱であったといわれるマイモニデスが、常にその側にいたとは考えがたい。[1][6][21]

しかし後述のリチャード一世が招いたときすでに侍医の地位にいたなら、サラディンの在世中であり、転戦してカイロに帰らなかったとしてもカイロ宮廷の主権者はサラディンであった。また後述の書簡に見る職務内容はスルタンに限

られていないので、フリーデンウオードや他の著者がいうように[21][26]、サラディンの宮廷の医師とするのが正しいと思われる。

フリーデンウオードは、宮廷におけるマイモニデスの職務を記載するのに、後にのべるVizierのbody physicianであり、サラディンのphysician of the courtであったと区別している[21]。これらはドイツ語のLeibarztおよびHofarztに対応するものと考えられ、君主・貴人に直属する個人的侍医と、組織の一員として侍医団に所属するものとの区別でないかと思われるが、bodyには組織体という意味もあり、正確な意味は著者には不明である。

多くの文献は、マイモニデスは、最初(一一八五年ごろ)[1][26]、Vizier(宰相)のカーディー・アルファーディル(Khadi al-Fad(h)-il or Abd ar Rahim ibn Ali al Baisani, Cahdi Abu Ali Abd el-Rahim el-Beisani od. el-Cadhi el-Fadhil, El Fadhl Beissâny)[21][17][18](一一三五―一二〇〇)の侍医となり、その後サラディンの宮廷に招かれたとしている。カーディーは(最高)裁判官という称号であり、アルファーディルはファーティマ朝から引き続きサラディンにも仕えた行政官で、サラディン第一の側近であった[60][61]。マイモニデスが再改宗者として処罰されるところを助けたのも、アルファーディルである。サラディンの転戦中も、アルファーディルはエジプトの行政を預かってカイロにいたので[61]、マイモニデスと親しかったとしても不思議はない。マイモニデスの著作『毒物と解毒剤』(Treatise on Poisons and Their Antidotes)(一一九八年)[10]は、アルファーディルの求めに応じて書かれた。なおサラディンのカイロ不在中、エジプト副王として権力を掌握していたのが、サラディンの弟アルアーディル(el-'Adil)(サファディン)であったという[60]。

マイモニデスの医学的業績『健康の保ち方』The Regimen of Health)(一一九八年)と『発作の原因について』(The Discourse on the Explanation of Fits or Concerning the Causes of Fits、別名Medical Answers《Responsa》)(一二〇四年)[11]は、うつ状態と心身症の傾向を持っていたサラディンの長子アルアフダル(Sultan al-Malik al-Afdal, Al Afdal Nur ad Din Ali, Malek el Afdhal)[18][26][29]のために、『交接について』(Treatise on Sexual Intercourse)は、蕩児であったサラディンの

甥（Sultan al Muzaffar Ibn Nur Ad-Din）[29]のために、『喘息について』（Treatise on Asthma）（一一九〇年ごろ）[9]はやはりサラディンの甥と思われる一貴人のためにに書かれた。

しばしばマイモニデスは、サラディンの長男アルアフダルの侍医となったとされる[1]。しかし一一九三年のサラディンの死後、息子や甥に支配領域が分配され、その際アルアフダルはシリアのダマスクスを中心とする領域を、サラディンの息子アジーズ（el-Malik el-Aziz）[17]はエジプトを与えられた[61]。宰相アルファーデイルもアジーズの下にとどまった。エジプトにいたマイモニデスが、アルアフダルに仕えたとは考えにくい。多くの文献は、先の著述二編がアルアフダルのために書かれたことから、侍医となったのもアルアフダルとしているが、ビュステンフェルトは、著述はアルアフダルのために書かれたが、アジーズの侍医となったとしており[17]、これが正しいと思われる。ヒッティも、アジーズの侍医としている[49]。著者は『健康の保ち方』は入手できなかったが、『発作の原因について』を見ると、スルタンが他の医師からすすめられた治療や養生法をマイモニデスが論評するという内容で、マイモニデスが直接診療していないことは明らかである。その点からも、ビュステンフェルトの見解を支持したい。

一方、「アスカロンにいたフランク人の王」もマイモニデスを侍医として招いたが、マイモニデスがことわったといわれる[2][21]。この「アスカロンにいたフランク人の王」は、すべての文献が英国王リチャード一世（獅子心王）（Richard I, the Lion Hearted, King of England）[26]としている。リチャード獅子心王は、第三次十字軍に参加して一一九一年六月パレスチナに到着、アッカー（アッコン、アッコ）包囲戦、アスカロン防衛戦に参加してサラディンと戦ったが、一一九二年九月、アスカロン防衛戦中にサラディンとの間に平和条約を結び、一一九二年十月にエジプトをはなれて故国に帰った[61]。もしマイモニデスの招聘が実際にあったとするなら、平和条約の成立から帰国までの期間に行われたものであろう。ガーシエンフィールドは、この件の仲介者をサラディンの弟アルアーディルでないかとしている[26]。ここでいうフランク人は、異邦人・異教徒から見たキリスト教徒・ヨーロッパ人のことで、北アフリカ、近東では、十字軍の兵士は出身がどこで

あろうとフランク人と呼ばれていた。[63]

このころのマイモニデスの生活を示す、弟子であり業績のヘブライ語訳者であったフランスのラビ、イブン・ティボン（Rabbi Samuel ben Judah ibn Tibbon of Lunel）（一一六〇―一二三〇）にあてた有名な書簡（以下「フスタートの生活についてのイブン・ティボン宛書簡」）がある[1][26]（注4）。それによると、マイモニデスは毎日フスタートからスルタンの城（サラディンはアル・カーヒラに城壁と城塞を建設したが、生前に完成しなかった。城塞は、カイロにシタデルとして残る）へ二キロほどの道をかよい、宮廷に病人がいるとなかなか帰ることができず、やっと帰宅するとたくさんの患者が待っていて、休むひまもなく空腹のままで診療にあたらなければならなかった。多くの研究者はこの書簡を文面通りに受け取っているが、この手紙はイブン・ティボンがマイモニデスの下に来て弟子になりたいという願いを断るためのもので[1][3][26]、内容に誇張もあろう。しかしコンミュニティー・宗教の指導者と宮廷侍医・開業医を兼ねた生活が、多忙を極めたことは想像できる。

この手紙が書かれた一一九九年にはアジーズは死去し、サラディンの弟アルアーディルが帝国を再統一して権力を握っていた。[60]従来の文献はカイロの権力者について詳しく検討しておらず、この手紙の中のスルタンを安易にアルアフダルとしているが、政治史上の変動を経時的に検討する必要があると思われる。ガーシェンフィールドを除いて、マイモニデスとアルアーディルとの関係も記載されていないが、この点も留意すべきであろう。

マイモニデスは四十年近くをエジプトで過ごしたのち、ユダヤ暦四九六五年テヴェット月二十日（西暦一二〇四年十二月十三日）（注2）にカイロで死去した。[1][2][21][26][28] ただしビュステンフェルトは、死去の年をイスラム暦六〇五年（西暦一二〇八年）とする。[17]マイモニデスの死は、諸国の離散ユダヤ人の間で広く惜しまれ、フスタートでは人々は三日間の喪に服した。[2]遺言により遺体はモーゼの通った道をたどってパレスチナに運ばれ、ユダヤ教聖地のひとつティベリアに葬られた。[21]伝説によれば、マイモニデスは遺言を残さなかったが、遺体をラクダに載せて自由にさせると、ラクダは水も食物も求めずに一週間歩き続け、ガリラヤ湖畔のティベリアに達してはじめて脚をとめたという。[6]マイモニデスの墓は、前稿で報告

した。[38]

マイモニデスはエジプトで再婚し、この結婚から生まれた一人息子アブラハム（Abraham, Abul-Meni Ibrahim）[33]は、マイモニデスが死去したときまだ十七歳であった。アブラハムは、後に父と同じく宗教家・医師となった。ちなみに『痔疾について』のヘブライ語手稿の一つに、アブラハムが付記している。[11]マイモニデスの子孫は、孫のAbu Soleiman Dawud Ben Abul-Meni, 曽孫のAbu Sa'idおよびAbu Schakirも医師となった。[17]ブロックシュタインは、マイモニデスの弟子として息子のアブラハム、イブン・アクニン、イブン・アビ・ウサイビアなどの名を挙げている。[1]

イブン・アクニン（Rabbi Joseph ben Judah ibn Aknin）（?―一二二六）はカイロに住んでいたが、アレッポに移り住んだ。サラディンの弟[1]（息子?）[61]の宮廷で侍医を勤めた。マイモニデスとの間に書簡の交換があり、Ibn Aknin宛のマイモニデスの書簡は、マイモニデスの生活と思想を知る史料として、イブン・ティボン宛の書簡と同様に重視されている。マイモニデスの著書『迷える人々への導き』は、Ibn Akninに献呈された。[2][7][17]

イブン・アビ・ウサイビア（Ibn Abi Usaibia or Abu Usaibu）（一二〇三―一二七〇）はシリアの眼科医・医学史家で、カイロの病院でアブラハムの同僚であった。[21]著書『医師の階層についての情報の泉』は、アラブ医学史の古典として現在でも広く用いられている。[64]

マイモニデスの妻の名前は著者には未詳だが、マイモニデスの妹（Umm Abu al-Rida.[5]ただしUmmはアラビア語の「母」で、Umm Abu al-Ridaは、マイモニデスの甥Abu al-Ridaの母にあたる人という意味しかない）の夫で、マイモニデスの妻の兄弟でもあったAbu-Maali ibn Hibatallah al Yahudiは、イブン・ジュマイ（注5）のあとを継いで、サラディンの侍医（body physician）になった。[21]Abu-Maaliは、最初サラディンの夫人の侍医となり、後サラディン自身に仕えたという。[5][21]al Yahudiは、フェズのヤフディ地区の生まれを意味するのでないかと思われ、フェズからカイロに逃れてきた一人だったのかも知れない。Abu-Maali ibn Hibatallahの子Yussuf ibn Abd Allahは、マイモニデスの著書『モーゼス・マイ

モニデスの医学箴言集』最終第二十五章を編集した。[2][21][26][65]

後述のマイモニデスの第十番目の医学的業績の原本を発見した、エジプトの眼科医で医史学者のマイヤーホーフ(Meyerhof, Max)(一八七四―一九四五)は、次のことを記載している。[66]

「カイロのユダヤ人居住区で奇妙な習慣がある。だれかが重病になると、家族が治療効果を求めてマイモニデスのシナゴーグに運んでいき、主祈禱室に何日か寝かせておく。一九三五年にエジプト王ファド一世が病気になった時は、ユダヤ人は王の着物を何枚か借りてきて、一週間祈禱室におき、それで病気が軽快したのはマイモニデスのおかげだと主張した。これは、ギリシャ人がアスクレピオスの神殿に集まったようなものだ」

この習慣についてグッドヒルは、「医学の呪術的要素をきびしく排斥したマイモニデスがこのことを知ったら、きっと怒ったろう」と書いている。[6]

六・マイモニデスの業績

多忙な生活の中で、マイモニデスは多くの業績を残した。マイモニデスの業績は三つに分けて考えることができる。ヨーロッパ思想に対する貢献、ユダヤ教に対する貢献、医学その他の学問に対する貢献である。

(一) 思想史上の業績

マイモニデスのもっとも重要な著作は、『迷える人々への導き』(Dalalat al-ha'irin)(The Guide for the Perplexed)(一一九〇年)[12]である。「迷える人々」というのは、ユダヤ教信仰と哲学、とくにアリストテレス哲学の間にあって迷う人という意味で、マイモニデスは伝統的なユダヤ思想とギリシャ哲学とを統一した思想体系を作り、信仰と理性とを調和させようとした。この立場は、キリスト教におけるスコラ哲学と共通するものがあり、マイモニデスの思想はスコラ哲学者トマス・アキナスらに受容され、トマスを通じてヨーロッパ思想界に大きく影響した。マイモニデスの影響を受けた

思想家として、アルベルトゥス・マグヌス、バルーフ・デ・スピノザも挙げられている。

ユダヤ教では、長い間に錯雑したものとなった口伝律法『ミシュナ』を整理して、『ミシュナ注解』(Commentary on the Mishnah)(一一六八年)、『ミシュネ・トーラー』(Mishneh Torah)(The Torah Reviewed)(一一七八年)を著し、十三条のユダヤ教基本信条を制定して、ユダヤ教教理の基本を確立した。[2][67][68] しかしマイモニデスの合理主義に保守的ユダヤ教徒が反発し、これがユダヤ神秘主義カバラを生み、ユダヤ教に大きな影響を残した。[2][67]~[70] マイモニデスの批判者であり、十三世紀に行われたいわゆるマイモニデス論争[71]の調停者となったのが前稿でのべたナフマニデスで、スペイン・カバラ発祥の地ヘロナ Gerona(またはジロナ Girona)で生まれている。[67][71]

マイモニデスを支持するものと反対するものとの対立ははげしく、後にマイモニデスの著書が焚書の対象となる事件まで起こった。[33][71]

だが六百年の後、マイモニデスの思想はふたたびユダヤ教に大きな影響をもたらした。モーゼス・メンデルスゾーン(一七二九―八六)は十八世紀にドイツで活躍したユダヤ哲学者で、音楽家のメンデルスゾーンの祖父である。レッシングの戯曲『賢者ナータン』はモーゼス・メンデルスゾーンをモデルとしているが、レッシングらが興したドイツ啓蒙主義に触発されて始まったハスカラ(ユダヤ啓蒙主義)において、モーゼスは大きな役割を果した。モーゼスはラビからマイモニデスの著書を紹介されてめざめ、保守的ユダヤ教ハシディズムに対立する論客となった。ハスカラがマイモニデスの影響を強く受けたことは、ナハマン・クロホマールの著書『われらの時代の迷える人々への導き』の題名を見ても明らかであろう。[72][73]

思想史上のマイモニデスの合理主義が私たちに重要なのは、医学における彼の反権威主義、合理主義に通ずるからである。[3][21][31]

(二) 医学的業績

ビュステンフェルトは、マイモニデスの医学的業績として十六冊を挙げている。[17] ルクレールは、ビュステンフェルトは同じ著書の別名を別の業績として数えているといい、十一冊を挙げ、最後の書物(アビケンナのヘブライ語訳)はマイモニデスの業績であることが疑わしく、また九冊目(現在のロスナーの分類では第十番目)は Ebn Abi Ossaïbiah (Ibn Abi Usaibia) による引用のみが知られているとした。[18] フリーデンウオードは、業績九冊を挙げている。[21]

ルクレールの著書の出版は一八七六年だが、一九三〇年代に、その九冊目(下記の第十番目)にあたるものの原本が、エジプトのマイヤーホーフによってイスタンブールのアヤ・ソフィア寺院(現在博物館)所蔵図書から発見され、[21][28][29] マイモニデスの医学的業績は下記の十編(英文名で表記)現存していることが定説となっている。[1][6][21][26][35][37]

(1) Extracts from Galen or The Art of Cure
(2) The Commentary on the Aphorisms of Hippocrates
(3) The Medical Aphorisms of Moses Maimonides
(4) Treatise on Hemorrhoids
(5) Treatise on Sexual Intercourse
(6) Treatise on Asthma
(7) Treatise on Poisons and Their Antidotes
(8) The Regimen of Health
(9) The Discourse on the Explanation of Fits or Concerning the Causes of Fits,別名 Medical Answers (Responsa)
(10) The Glossary of Drug Names

興味深いことは、これらの業績のうち第四から第九までの六編が、王、王族、貴人、名士などの諮問、要請、治療経験から書かれたことで、マイモニデスの医学的業績が侍医としての生活から切り離せないものであることを示している。

第四編は、名家に生まれたある青年の病気に触発されて書かれた。[11]

上に挙げた業績の他に、マイモニデスの名前を付した「医師の日々の祈り」が知られているが、[74][75]これがマイモニデスによるものか早くから疑いがあり、ロスナーはこれは一七八三年にドイツで発表されたもので、マイモニデスのものではないという。[43]ガーシェンフィールドは疑いがあることを認めながら、多くの人がその基調と精神からマイモニデスのものと考えているとしている。[26]グッドヒルは、ヒポクラテスの誓いもヒポクラテスが作った確証はないとして、この祈りを弁護している。[6]著者は、この祈りにおける神・人の関係が、ユダヤ教的でなくむしろキリスト教的に感じられるところから、マイモニデスの作でないと想像しているが、機会を改めて検討したい。ロスナーは、この祈りに現れた思想は中世のものでなく、十八世紀のものであるという。[43]

またマイモニデスの宗教的著作にしばしば医学的な問題が扱われていることを、多くの研究者が指摘している。

マイモニデスの医学的業績の扱った範囲は広く、また単にガレノスのような古典を祖述するだけでなく、これを合理的思考によって批判的に受け入れることをすすめ、近代医学のさきがけとなった。『モーゼス・マイモニデスの医学箴言集』第二十五章は、ガレノスの記述に疑問をもった内容を集めている。[8]マイモニデスの甥がこの章を編集したことは先にのべた。

これらの医学的業績については、稿を改めて発表する。

(三) マイモニデスの業績の使用言語

医学的業績はすべてアラビア語で書かれ、[28][31]多くヘブライ文字が使われているが、テキストによってアラビア文字が使われているものもある。またヘブライ語訳のみが残っている業績もある。

『ミシュナ注解』、『迷える人々への導き』もアラビア語で書かれているが、『ミシュネ・トーラー』は、ヘブライ語で書かれた。マイモニデスの医学的業績は、アラビア語で書かれたものも、早くからヘブライ語、ラテン語などに訳され

ている。

よく『モーゼス・マイモニデスの医学箴言集』、『迷える人々への導き』の別名として、「ピルケ・モシェ（Pirkhe Mosheh）」[26]、「モレー・ネヴォヒム（Moreh Nevochim）またはネブヒム（Nevukhim）」[1]が挙げられるが、これはヘブライ語訳の名称である。モレーは、現代ヘブライ語では教師を意味する。

マイモニデスの生涯を理解する上で重要な、二、三の問題についてのべる。

七・離散ユダヤ人のコンミュニティーとマイモニデスの家系

ユダヤ民族史とユダヤ教史の長く複雑な過程を要約するのはむずかしく、この項の内容もごく一部であることをことわって置きたい。

ユダヤ民族がバビロン捕囚から帰国を許されたとき、かなりの数のユダヤ人がバビロニアにとどまった。このようにユダヤ人が、「約束の地」パレスチナをはなれて他国に住んだのがディアスポラ（離散）である。離散ユダヤ人は、どこにあってもユダヤ人コンミュニティーを形成し、ユダヤ教信仰をコンミュニティーの存立基盤とした。離散ユダヤ人は早くから各地に居住していたが、とくに紀元七十年、第一次ユダヤ戦争におけるエルサレム陥落と神殿の破壊後、多くのユダヤ人が国外に逃れた。[67]

エルサレム陥落まで、ユダヤ教にも儀式を司る祭司が存在した。しかし神殿が失われ、祭司のほとんどがエルサレム陥落の際に命を失ったこと、祭司が反乱の中心であったことから、祭司制の下での再建は不可能であった。そこで律法を教育・理解させることをユダヤ教信仰の基本的方法とすることになり、重要な土地に律法の研究と教育にあたるイェシバ（ユダヤ高等神学校）が設置され、その校長ガオン（複数ゲオニム）が各地のコンミュニティーを指導する新しい体制

が生まれた。エルサレム陥落前の祭司の時代に対比して、ラビ（ユダヤ教教師）の時代と呼ばれる。[67][71]

前稿にのべたように、エルサレム陥落後、ユダヤ教の中心はガリラヤ地方に移った。しかしローマ帝国支配下のガリラヤ地方は制約が大きく、ユダヤ教の中心はバビロニアに移り、バビロニアにいた指導者が全国のユダヤ人コンミュニティーを統括した。[67][71]

イスラム教徒支配体制が成立し、さらにそれがいくつかの王国に分裂すると、離散ユダヤ人の中でも各地コンミュニティーの自治が重視され、各地に作られたイェシバの長ガオンが、ナギド（イスラム諸国で、支配者によって任命されたユダヤ人コンミュニティーの指導者）の職を果すこととなった。[71]

これらの指導者は、最初は家柄が重視され世襲制でえらばれたが、後には能力主義にかわり、研究・教育・管理に優れたものが指導者となった。しかしこれは逆に、知的能力に恵まれた家系の出身者が指導者の地位をたびたび占めることになり、指導者層の固定化を来した。[71] マイモニデスの家系は、そのような家であったと思われる。[2]

マイモニデスの父がその職にあったダヤンは、もとはアラム語のダヤーヌ・デ・バヴァー（dayyanu de-bava）（門の裁判官）という言葉からきており、イェシバの正門で開かれた、コンミュニティー内の事件をさばく裁判長を務めるもので、ガオンに次ぐ地位であった。ガオン、ダヤンおよび十人の賢者が、コンミュニティーの最高指導機関サンヘドリンを形成した。[71]

マイモニデスはカイロにおいて、全エジプトのユダヤ人コンミュニティーの指導者ナギドの地位についたとされる。[1][6][7][21]

文献は、マイモニデスのこの地位を、サラディン[1][6]あるいはアルファーディル[7]から任命されたものとしている。

（注及び参考文献は次々号末尾に一括掲載）